釧路新聞
平成5年(1993年)4月9日（金曜日）

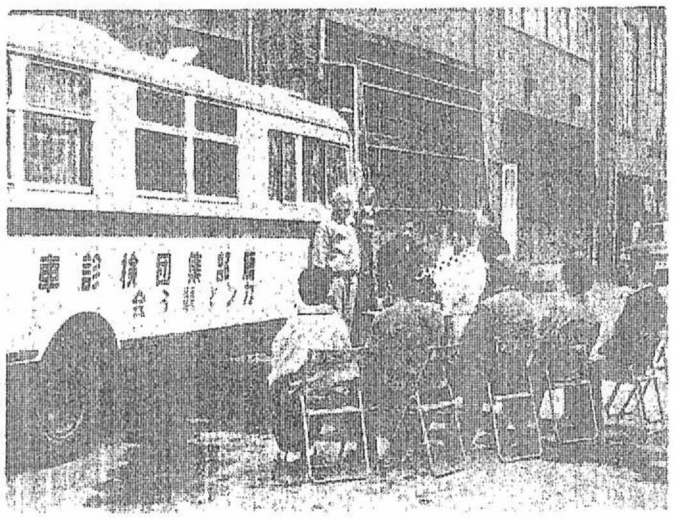
肝炎の中でもC型がこわい

ひと口に肝炎といってもいくつかの種類がある。肝炎をおこすウイルスの種類によってAからE型に分けられる。その中でも最近注目されているのがC型肝炎だ。以前は非A非B型と呼ばれていた肝炎の大部分を占めるもの。C型肝炎から肝硬変、肝臓がんに進むものも多い。

肝硬変、肝臓がんに進行

約70%はウイルス性の肝炎

日本の肝臓の病気の約70%はウイルス性の肝炎だ。そしてそのウイルスの種類によって分類される。かつてはA型、B型、非A非B型に分類されていたが、1988年にC型のウイルスがアメリカで発見された。非A非B型の大部分はじつはこのC型肝炎だったのである。



初期症状は風邪によく似ている

ところで、肝炎が恐れられるのは慢性化し、やがては肝硬変と肝がんといった経過をたどることだ。A型の場合は感染経路が患者の便から出たウイルスが、口から感染するもの。B型は輸出など、血液・体液から感染するが、大人になってからの感染なら症状が出ずに治ってしまい、慢性化することはあまりない。

B型と同じく血液の体液による感染のC型の方はというと、成人後の感染であっても急性から慢性に移行しやすいのだ。

肝炎の急性期の初期症状は風邪によく似ている。肝臓の病気だから、腹部に痛みがあるのでは、と思いがちだが、実際は体がだるく、微熱がある、食欲がないといった症状なのである。しかも、しばらくすると症状がとれてしまうから見逃したままになりかねない。

おかしいと思ったら専門医の検査を

おかしいと思ったら、専門医の検査を受けること。血液検査で血小板の数を調べる。それで、おかしいとなったら肝生検だ。皮膚の外から針を刺し、肝臓の組織の一部をとって調べる方法だ。

その結果、C型肝炎となれば治療しなければならない。一般に進行はゆるやかだが、5年から10年で肝硬変になってしまう可能性が強い。さらに肝臓がんに進行することも考えなければならない。

治療法にインターフェロン

いま、C型肝炎の治療として用いられるのはインターフェロンだ。これは体内のC型肝炎ウイルスの増殖を抑え、軽度ならウイルス除去効果もある。治療率は軽度で60%、中等度40%、重度20～30%とされている。しかし、このインターフェロンはかなり高額で6カ月間の投与で100～500万円近く。保険の適用は中等度以上となっている。

急性期の初期症状は風邪によく似ている。血液検査で血小板の数を調べてもらう。

輸血や体液感染というとエイズがクローズアップされるが、C型肝炎の予防にも手抜かりがあってはならない。

MRSAの毒素を特定

血清療法に道

野田・千葉大教授の研究で

院内感染の多発で問題となっているメチシリン耐性黄色ぶどう球菌（MRSA）の一部が、心臓を停止させる作用のある猛毒をつくり出すことが、千葉大医学部の野田公俊教授の研究で明らかになった。

MRSAに感染すると激しい腸炎などを起こし、死亡することもあるが、原因は分かっていなかった。今回の発見で、毒素をつくる強毒型とつくらない弱毒型にMRSAを分類できるようになるほか、毒素を中和し症状を抑える血清療法への道が開ける。また野田教授は、この毒素が「急性心不全による突然死の原因になっている可能性もある」としており、注目を集めている。

野田教授はMRSAによる腸炎で死亡した患者から取り出した菌を培養し、数種類の毒素を発見。このうち、たんぱく質でできた二種類の毒素の精製に成功した。

精製されたのは、分子量約五万で熱に弱い毒素と分子量約四万で熱に強い毒素の二種類。それぞれ百万分の一に薄めてマウスに注射したところ、十五秒で心臓が停止した。二種類の毒素を混合すると、毒性が強まることも分かった。

人間に対する作用は確認されていないが、同様に心臓を停止させる作用があるとみられる。また、さらに濃度を低くすれば、腸炎の原因となる可能性もあるという。

MRSAは抗生物質がほとんど効かない。老人や手術直後など体が弱っている人が感染すると重症病院などでの集団感染し社会問題化する。